

Ben Witherington III with Darlene Hyatt,
*Paul's Letter to the Romans: A Socio-Rhetorical
 Commentary* (Grand Rapids/ Cambridge:
 Eerdmans, 2004)⁽¹⁾

伊 藤 明 生 (東京基督教大学教授)

本書は、米国ケンタッキー州ウィルモアにあるアズベリー神学校の新約学の教授 Ben Witherington III が著したローマ人への手紙の注解書である。著書が多数ある Witherington が近年、A Socio-Rhetorical Commentary (社会学・修辞学的注解) と称して執筆しているシリーズの最新刊である。本シリーズの既刊には、コリント人への手紙第一と第二、ガラテヤ諸教会宛の手紙、使徒の働き、マルコによる福音書がある⁽²⁾。本注解は、数多くあるローマ書の注解の中でも、初めての本格的社会学・修辞学的注解であり、尚かつアウグスティヌス／ルター／カルヴァンのローマ書の読みに囚われないアルメニウス・ウェスレー神学の視点からの注解であると著者は謳っている。ローマ人への手紙の注解書の数の多さ、また様々な角度からの関連する学術論文・研究の膨大さを考慮すると、本注解が四百頁程度であることは意外であると共に、物足

(1) 巻末の索引まで含めると、本文は421頁あり、目次と参考文献表などは38頁ある。

(2) *Conflict and Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans; Carlisle: Paternoster, 1995); *Grace in Galatia: A Commentary on Paul's Letter to the Galatians* (Grand Rapids: Eerdmans; Edinburgh: T & T Clark, 1998); *The Acts of the Apostles: A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids/Cambridge: Eerdmans; Carlisle: Paternoster, 1998); *The Gospel of Mark: A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids/Cambridge: Eerdmans, 2001).

らないと感じざるをえない⁽³⁾。しかし、視点が明確にされ、特徴がはっきりしていることが本注解の価値でもある。年々出版される注解書が分厚くなる傾向が強い近年、詳細で大部な注解書が必ずしも良いとは限らないことを注解者の側も読者たちも肝に銘じるべきだと評者は思う。

Witherington によると、ローマ人への手紙執筆当時のローマ教会は、紀元49年のクラウデオ帝のユダヤ人追放令に大きな影響を受けていた。クラウデオ帝が54年10月に死去し、追放令は無効となり、徐々にユダヤ人キリスト者たちも東方からローマに戻って来た。しかし、ユダヤ人キリスト者の留守の間、教会を守ってきた異邦人キリスト者たちは、傲慢になり、ユダヤ人キリスト者たちとの関係は容易には修復できなかった。教会で多数派を占める異邦人キリスト者たちが少数派のユダヤ人キリスト者たち（「信仰の弱い者たち」）を受容し、教会内の融和を促す目的で、紀元57年⁽⁴⁾春にパウロはコリントから手紙を書き送った。著者 Witherington は、ローマ人への手紙を、そのように理解する。

アリストテレスの『弁論術』以来の弁論の三種類（法廷的、審議的、演示的）から言うと、ローマ人への手紙は審議的（deliberative）弁論である、と Witherington は論じる。審議的弁論の中でも、特に融和を促す弁論（rhetoric of concord）であるとする。1章から8章までの神学上の議論が手紙の主要な部分で、イスラエルの救いに関する9章から11章、道徳的奨励である12章から15章は、多かれ少なかれ付け足し部分であると理解されがちであるが、むしろ逆に、12章以降こそがローマ人への手紙のクライマックスであり、パウロがローマのキリスト者たちにわかって欲しいことである、と本注解では論じられている。圧巻は、16章3節から16節の挨拶の言葉は、ローマ教会の異邦人キリスト者たち

(3) 例えば、千頁に及ぶ D.J. Moo 著の New International Commentary シリーズのローマ人への手紙注解（Grand Rapids: Eerdmans, 1996）と比較のこと。

(4) 59年母親、セネカなどを殺害してから、ネロ帝はキリスト教会の迫害・弾圧を始めた。

(パウロが専ら語りかけている人々)が、ユダヤ人キリスト者たち(名前が列挙されている人々)を受容することが修辞学的意図である、と Witherington は論じる。ローマ書全体の構造の面からも個々の注解の際にも修辞学的に、そのような読み方の妥当性を著者は本注解全体を通して論じている。

ローマ人への手紙の構造という観点から、Witherington は 5 章 1 節から 11 節を、鍵と把握している。1 章 18 節から 4 章 25 節をまとめる役割と同時に、5 章 12 節から 8 章 39 節までを導入する役割の両方を兼ね備えている、と理解する。しかも、4 章までで信仰義認が、5 章以降で聖化論が論じられている、という組織神学的構造分析を Witherington は好まない。むしろ、1 章 18 節から 4 章 25 節までと 5 章 12 節から 8 章 39 節までとは、同じ事柄を異なる視点から論じている、と理解する。前半では、一般論として罪人である人類の断罪から始まり、アブラハムの信仰で 4 章が終わっている。他方、後半ではアダムから始まり、被造世界全体の墮落に言及した上で、キリストにある者たちはキリストの愛から絶対引き離されないと締めくくられている。前半の一般論から具体例というサイクルが、後半では逆転していることに着目している。

Witherington は、本文の注解を始める前に、参考文献表そのものとは別に参考となるガイド的図書と注解書とを短く的確に説明して紹介している。ローマ人への手紙の各段落の注解では、先ず修辞学的分析が提示されている。クインティリアヌスなどを中心として関連する修辞学的資料が紹介され、それから私訳、注解が続き、最後には「地平線の橋渡し (Bridging the Horizons)⁵⁾」と題する適用に触れて終えている。個々のギリシャ語の単語の分析、ギリシャ語原文の文法分析など伝統的な注解書に見出されるものは、本注解では、全体に占める割合は限られている。

(5) 表現自体には、哲学の領域で言う(一般)解釈学的視点が反映している。とりわけガダマーの「二つ地平線(著者の地平線と読者の地平線)の融合」は余りにも有名であるが、Witherington は直接には、そのようなことを意図していないようである。

「詳細に (A Closer Look)」と称する興味深い小論文が所々に散りばめられている。

ローマ人への手紙5章6章で頻繁に出てくる「義」はあくまでも神が人に行うことを求めている「義」であって、神が賜物として下さる義認の「義」と Witherington は明確に区別する。7章の「私」がだれであるか、については様々な議論があり、解釈が提案されてきた。Witherington は、S. K. Stowers⁽⁶⁾らの見解に従って、「人格化 (impersonation)」と理解し、7章7節から13節の「私」はアダムで、14節から25節の「私」はアダムにある者たち（あるいは「アダムの種族」）と解釈する。また、8章29節30節は「聖徒の堅忍」に関することであって、予定論ではないと論じられている。一般的に、ユダヤ教の背景およびパウロの議論展開を根拠にして、予定論の教理を認めつつも、常に信仰者が堕落・背教する可能性をパウロは認めている、と Witherington は論じている。8章最後で、キリスト者を如何なるものもキリストの愛から引き離すことはできないとパウロは主張しているが、パウロが背教・棄教に言及していないことを指摘している。Witherington によると、意図的に信仰を捨てる場合にはキリストの愛から引き離される可能性があることをパウロは認めている、と言う。著者のアルメニウス・ウェスレー神学の視点が反映していると言えよう。

古代の修辞学・弁論術に多少精通していないと、本書を読み進めるのは骨が折れる作業となると思われる。しかし、仮に修辞学に関する予備知識がなくても、クインティリアヌスの『修辞学教育 (Institutio Oratio)』とローマ人への手紙のギリシャ語本文とを手許に置いて見ながら、本注解を読み進めて行くのも修辞学批評を理解する一つの手立てかもしれない。そういう作業を積み重ねて行くと、修辞学的分析の有用性と限界を

(6) S. K. Stowers, *A Rereading of Romans: Justice, Jews and Gentiles* (New Haven: Yale Univ. Press, 1994).

十分に体験することができる。

勿論、評者は Witherington の個々の解釈（以上に紹介したものも含めて）に全面的に同意する訳ではないが、概して推薦することができるローマ人への手紙の注解である、と思う。ある程度、釈義の基本の心得があり、ローマ人への手紙のギリシャ語本文と真剣に取り組んでいく姿勢さえあれば、十分に活用していくことができる。そして、そのような努力は必ず報いられると評者は信じる。あるいは、ローマ人への手紙全体を一通り学んだ上で、本注解を読むか、他の注解書を読んでから読むか、または他の注解書と見比べながら読むことをお勧めしたい。尚、他の注解書からの引用文⁽⁷⁾の多さと誤植⁽⁸⁾が少々目立ったと評者には見受けられた。

（7） Witherington の先生であった C. K. Barrett の注解書から引用が多いのは致し方ないことであろうか。

（8） J. A. Ziesler は一貫して J. A. Zeisler となっている！